

校内研究だより

# 学びの深化

No. 2



平成30年6月25日号  
文教大学附属小学校

## 研究主題 「学ぶことを楽しむ！」

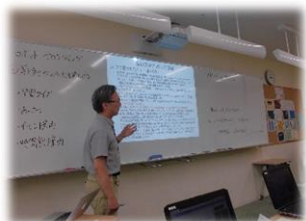
～文教大学附属小学校型 ディープアクティブラーニング

学びの深化を目指して「自ら問い続ける子どもを育てる授業」～

平成30年6月25日(月)、本年度第一回目の研究授業を行った。

今回は、5年2組担任太田隆平教諭が「ロボット・プログラミング」の教材から、「学校でペッパーを活用しよう」という本時授業を本校初の教科である、総合的な学習から授業を提案した。

児童たちは、校内案内や行事案内、学習クイズなど自分の決めたテーマから会話ややりとりのイメージを膨らませ、前時に記入した命令ブロックを手元に、自分の思ったようにペッパーと会話ができるようにプログラムを組んだ。時間がかかる児童には太田教諭が共に確認したり、予め用意した「超ヒント」ファイルを参考にさせたりするなど、個への手立てもあり、児童たちは、トライ＆エラーを繰り返し試行錯誤しつつも、自らプログラムを組むことができていた。



今回の研究授業は、東京学芸大学附属世田谷小学校 校長 松浦 執先生を講師としてお招きし、授業後に指導・講評を頂いた。

松浦先生には、本時の授業においては、エラーが出た時、児童たちに「なぜエラーが出たのか」を考えさせることが大切であるというお話を頂いた。これは、プログラミングにとどまらず、普段の学校生活も同様

であり、惰性ではなく考えて論理的に動くことの必要性を改めて感じさせられた。

その後の講評では、プログラミング教育における様々なお話を頂いた。まず、なぜ今「プログラミング教育」が騒がれているのか。テクノロジー大国・日本、といわれたのはもう過去であり、AI分野を筆頭に現在日本は、中国はじめ諸国に大きく遅れをとっている。その要因の一つとして、プログラミングを教育として取り組んでいる日本の学生の割合は、わずか1.5%であり、諸国と比べ圧倒的に触れる機会すら与えられていないことが挙げられる。松浦先生からは、小学校でそこまで深く教え込む必要はないが、PCに触れる機会、情報を扱うという行為は小学校の段階で取り組ませるべきである、というお話を頂いた。

今回の授業と松浦先生のお話を受けて、教員一人一人が改めてプログラミング教育について深く考える必要があると感じた。子どもたちに身につけさせたい力を見極めた上で、本校でも積極的にプログラミング教育に取り組んでいきたい。